

達磨寺略縁起

当寺は、奈良県北葛城郡王寺町にあって、達磨大師、聖徳太子、千手観音菩薩を本尊とする臨済宗南禅寺派の寺院です。

日本書紀や元亨釈書などによりますと、推古天皇21年12月1日、聖徳太子が片岡に遊行された際、一人の異人が道に伏して飢餓に苦しんでおられました。太子はこれを憐れんで衣食を給し、一首の和歌を詠んで去られました。その翌日、飢餓に苦しんだ異人は亡くなられ、太子は側近の者に命じて厚く葬らせ、後日その屍を検視されると、屍が消え、衣服だけが棺上に残されていました。世人は、これを達磨の化身だと云い、その奇跡に驚きました。

この棺上に達磨塚を整え、さらに精舎を建立して、聖徳太子御自刻の達磨の木像を安置したのが当寺の濫觴と伝えられています。

その後、荒廢していたところ、建久年中に安置の解脱上人が達磨の木像を繕い、荒堂を修め、塚上に三層の塔婆を建てて初めて達磨寺と称されました。

ところが、嘉禄年中には興福寺僧の焼化となり、再び荒廢に帰っていたのを、延応年中に松尾の藤月上人が再興し、永享年中に至っては建仁寺の南峯禅師が住持となって足利の幕命によって中興されました。

永禄年中には松永久秀の兵火にかかり、多くの堂宇を失ったものの、正親町天皇の諭旨、さらには豊臣秀頼によって再建事業が果たされました。慶長7年には、徳川家康から30石の朱印地が安堵されています。

◆ 本堂拝観



現本堂は平成16年に落慶し、堂内には本尊をはじめとする数多くの文化財を陳列した達磨寺資料展示室を備えています。

通常は閉まっていますが、土・日曜日は、王寺観光ボランティアガイドの会のご協力により拝観していただけます。平日の拝観については、事前にご連絡ください。ご要望に応じて坐禅体験を実施しています。お問い合わせください。



臨済宗南禅寺派 片岡山



聖徳太子遺跡霊場 第十九番

奈良県北葛城郡王寺町本町2丁目1番40号

TEL 0745-31-2341

境内の名所旧跡



問答石 (左:達磨石 右:太子石)
 聖徳太子と達磨大師が出会ったとき、互いに歌を詠み交わした場所であると伝えられています。

(聖徳太子) しな照るや 片岡山の飯に飢えて 臥せる旅人 哀れ親なし
 (達磨大師) 斑鳩や 富の小川の絶えばこそわが大君の御名を忘れぬ

松永弾正久秀墓

戦国時代

天正5年(1577)、織田信長に謀反した松永久秀は、信貴山城にて織田軍に包囲され自害しました。そのさいに筒井氏が首級をここに埋葬したと伝えられています。現在は、風化により見えなくなっていますが、「松永弾正久秀墓」「天正五年十月十日」の銘文が刻まれていました。



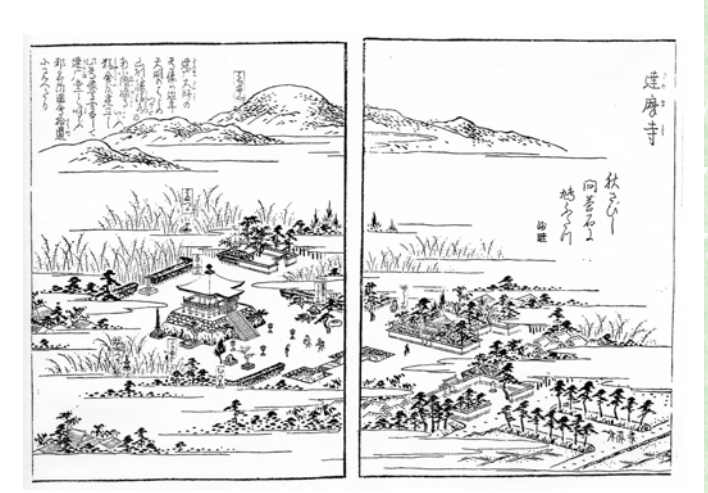
雪丸像

雪丸は、聖徳太子が飼っていた犬で、人の言葉が話せ、お経を読み、臨終のさいには「自分を達磨塚の丑寅(北東)に葬るよう」と遺言したと伝えられています。現在は、達磨塚のある本堂の南西の位置におまつりしていますが、もとは北東にある達磨寺1号墳のところにありました。王寺町のマスコットキャラクターの雪丸は、当寺の雪丸像から誕生しました。



王寺町マスコットキャラクター「雪丸」▲

江戸時代の達磨寺境内



寛政3年(1791)に出版された『大和名所図会』には、当時の達磨寺境内の様子が描かれています。現在の境内とほぼ同じ状況が確認でき、雪丸像の石造物も見ることができます。

本尊



木造聖徳太子坐像

国指定重要文化財
鎌倉時代

中子冠をかぶり、笏を手にとる聖徳太子摂政像です。銘文から建治3年(1277)に院恵・院道が制作したことがわかります。袍の皺部分にわずかに彩色が残り、もとは緋色に着色されていたことがうかがえます。



木造千手観音坐像

王寺町指定文化財
室町時代

本像は現状で392手あり、もとは500手で構成されていたと考えられています。すべての掌に玉眼による目が表現されており、精巧な造りの背景には、当寺中興の際の室町幕府の支援があったと推測されます。

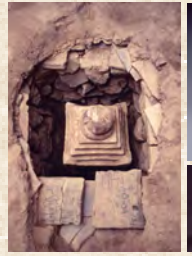


木造達磨坐像

国指定重要文化財
室町時代

銘文によれば、永享2年(1430)に足利義教が命じて制作させたものです。彩色は画僧の周文が担当し、衣が鮮やかな朱色に塗られ、鬚や胸毛などまでが繊細な筆づかいで見事に表現されています。

本堂内の文化財



(写真上) 出土状況 (写真右上) 宝篋印塔 (写真右下) 水晶製五輪塔形舍利容器



達磨寺出土石塔及び舍利容器

奈良県指定文化財
鎌倉時代

現本堂建替に伴う発掘調査で平成14年に発見されました。本堂の地下に小石室を作り、そのなかに宝篋印塔、合子、水晶製五輪塔形舍利容器、仏舍利を入れ子式に埋納したものです。鎌倉時代の当寺整備にあたり、達磨大師への追慕の念を込めて納められたと考えられます。現在、出土品は、遺構の直上におまつりしています。

備前焼大甕・青磁香炉

(達磨寺中興記石幢地下遺構出土品)

国指定重要文化財(附)
室町時代

平成12年、本堂裏手にある達磨寺中興記石幢の地下から、嘉吉2年銘石碑が碑面を伏せ置いたかたちで発見され、さらにその下に備前焼大甕が埋められており、そのなかに青磁香炉が入れられていました。碑文などから、室町時代の当寺中興に尽力した南峯禅師に関わるものと推測されます。

(写真上) 青磁香炉 (写真下) 備前焼大甕



達磨寺中興記石幢

国指定重要文化財
室町時代

永享7年(1435)に南禅寺惟肖が撰述した達磨寺中興記を、文安5年(1448)に南峯禅師が建立しました。平成12年には、地下から嘉吉2年銘石碑などが発見されました。



達磨寺1号墳(雪丸塚)

古墳時代後期



横穴式石室をもつ径約15mの円墳です。この古墳が遺言にもとづいて葬られた雪丸の墓であると考えられています。また、聖徳太子が密かに法隆寺から通っていたという地下道があると伝わっており、古墳の石室がそれにあたると考えられます。

達磨寺方丈

奈良県指定文化財
江戸時代

棟札から寛文7年(1667)に建立されたことが判明します。屋根の形状に特徴があり、西面が入母屋造、東面が切妻造で非対称になっています。奈良県では希少な方丈様式です。



達磨寺境内略図

